

阿倍比羅夫北征考

室賀信夫

【要約】 国史がミシハセに肅慎の文学を当てるのは中国の世界知識による北辺の異民族への解釈を示すが、これはおそらく六世紀末以降の高麗との通交に導かれた日本の北辺と大陸東北部との近接という地理的觀念に負うものだろう。阿倍比羅夫の北征は、従来いわれたようなミシハセと蝦夷との紛紜への単なる介入ではなく、この地方の地理的關係を明らかにしようとする探検の性格を強く帯びており、その直接の目的は当時の国家的要請であつた海外ルート^①の發見にあつたのではないかと思われる。日本の北辺と大陸との地理的關係は一九世紀のはじめまで解決されなかつた地理学史的課題であるが、比羅夫はこの二つの地方に住む民族の一致という形でこれに答えようとしたのである。

わが国における地理的知識の發展のうゑに、北辺の地域の探究がとくに重要な意味をもつことを、私は嘗て論じたことがある。^① 近代に至るまで、この地方は日本人にとつてばかりでなく、ヨーロッパの探検航海者たちにとつても、深い乳色の霧にとざされたテラ・インコグニタとしてとどまつていた。だからその發見の歴史は、そのまま日本の地理像の形成と、その東アジアにおける定位の過程でもあるだろう。そしてこの問題の源流をたずねる時、私にはそれ

が七世紀における阿倍比羅夫の遠征にまで遡り得るように思われる。

史上に名高いこの壮挙について、書紀は阿倍臣の率いる舟師が、齊明稱制の四年、五年（六五八、六五九）饒田、淳代、津輕方面に進出して渡嶋の蝦夷を招撫し、翌六年肅慎の国を討つて弊賂弁の島に戦つたと伝えている。しかしその記事には疑問の点が多く、古くから史家の間に議論のあるところだつた。ことに最近に至つて田名網宏、村尾次郎、

坂本太郎の諸氏による精詳な論考が相次いで発表され、その解明への試みはふたたび活潑化したように見える。^②私もまたここで、従来多く顧られることのなかつた地理学史的な視野のなかに、もう一度この問題をとらえてみようと思う。それによつて或はこれらの先学の業績に、なお二三の見解を補うことができるかも知れないと考えたからである。

一

阿倍比羅夫北征の物語は、肅慎という謎めいた民族の登場によつて、蝦夷との交渉史のなかでも特にユニークな色彩を与えられている。この異様な民族は欽明朝に佐渡への奇怪な漂着者として現われたのを除いては、斉明紀において唐突にスポットを当てられ、しかもその後わずかな残像をとどめたばかりで、永久に国史の上から消え去つてしまふ。それだけにその実相をとらえることは容易でなく、諸家の考説もおのずから多岐に亘らざるを得なかつた。

もともと肅慎とは、周知のように中国の古典に極遠の地に住むとされた伝説的な民族である。それが三国のころから今の満州の寧古塔付近を中心とする挹婁に付会され、魏

志挹婁伝はこれを「古之肅慎氏之国也」というに至つた。それ以来肅慎は現実の挹婁、女真、靺鞨などの名を以て呼ばれる満州方面のツングース系民族と考えられてきたのである。^③

一方、国史に見える肅慎はミシハセ又はアシハセと訓まれる。ここでは通説によつてミシハセに従つておくが、今私にはその語義を明らかに得ない。ただそれが肅慎の音を写したものでない以上、少くとも言葉の上だけでは大陸の肅慎と関係がなく、むしろ北方の異族に対する蝦夷の呼称をそのまま受けついでものかと考えられる。しかも国史の上で、そのミシハセに肅慎の文字が当てられたということは、当時の大和の人々が、国土の北辺で接触したこの異民族を、中国から学んだ世界知識によつて解釈したことを意味するだろう。私は国史上の肅慎を理解するうえに、これは重要な点だと思う。北辺の徴々たる夷狄が大きくクローズ・アップされたのは、一つにはそれが大陸の古典的な民族に identity されたことによるのだろうと考えるからである。その意味で国史に現われる現実の民族としてのミシハセと、その解釈としての肅慎とを、われわれはいつも注意ぶかく

區別しておく必要がある。では、このような解釈が行われたのは、どういう理由によつたのだろうか。

これに対するもつとも素朴な答は、書紀の記すところをそのままに、この両者を同一視するか、少くとも極めて近縁關係にある民族と見做すことである。ミシハセの音が靺鞨の転訛であるとした那珂通世博士や、古く樺太、北海道方面にまで来往したツングース系の民族を考えた村岡良弼、吉田東伍、白鳥庫吉などの諸氏がそれだつた。^④これらの説では渡嶋は北海道に、弊賂弁の島は樺太に比定されているが、これは書紀の編者の解釈と歴史事実とを混同したばかりでなく、今日の地理的知識によつて古代を類推したという二重の誤をおかしている。

だが齊明紀の記事に対する疑問は、やがて丸山二郎氏によつて提出され、さらに津田左右吉博士がそのモニュメンタルな業績のなかで書紀の本文に徹底した合理主義的批判を加えるに至つて、比羅夫北征の事跡は新たな再構成を受けることになつた。^⑤博士はそのなかで渡嶋を齋田、淳代、津輕の地方を含む総称であつて、しかも時代とともに変化する概念であるとし、また肅慎は、最後まで服属しなかつ

た本州の最北端に住む蝦夷の諸部落に対して用いられた中国風の雅名であるとされた。たしかに渡嶋を、その先入観となつていた北海道から、また肅慎を滿州ツングースから解放したのは博士の独創的な見識であつた。だが渡嶋については諸家は大体において博士の見解を支持しているが、肅慎に関しては異論が多い。書紀によると渡嶋の蝦夷はミシハセを自己と異なる種族だと見ているし、書紀の編者自身も一貫してこの両者をはつきりと區別する態度をとっているから、肅慎の文字が單なる文飾から出たとは考え難いのである。

これについて田名網宏氏は古代蝦夷に関する近年の形質人類学上の成果を背景として、蝦夷が人種的に日本人と大差ない民族であるのに対し、ミシハセこそ北海道に住むアイヌであるとの説を主張された。これはたしかに魅力に富む発言であると思う。ただ書紀のなかでミシハセと蝦夷とが區別されているということは、必ずしも両者の人種的相違までも意味するものではない。居住地の懸隔や敵対行為の継続が、人種的に近縁關係にある民族を互に意識のうえて異種族とする例はしばしばだし、生態の上でも異なつ

た環境への適應による分化ということも考えられよう。とくに書紀はミシハセの民族の特徴について断片的に触れているに過ぎないし、それが特にアイヌであるという表象を受けているのでもないのである。だから今後人類学上の資料が豊かとなり、古代蝦夷非アイヌ説が立証されたとしても、たしかにそれによつてミシハセがアイヌであることの蓋然性は高まるであろうが、それが決定的なものになるには、なお多くの困難があるかと思われる。

もとより私もこの謎の民族のために、今日の人種名彙のなかで安定した座席を見出してやることを願っている。だがもしそれに成功したとしても、それによつて直ちに古代の人々がミシハセを肅慎と考えた理由を明らかにすることができるだろうか。田名網氏はそれについて、日本人が「北海道や千島・樺太の、蝦夷とはちがつた異族の存在を知れば、これらは沿海州方面の、中国で肅慎と呼んだ民族とは同一の民族であろうと考えるのも当然といわねばならない」と述べておられる。この考えは津田博士の雅名説を否定し、この問題をふたたび地理的關係のなかにとらえた点で結論的には正しいと思う。しかしその解釈のしかたは

少し安易に過ぎた。田名網氏は従来この問題を論じた多くの史家と同様に、現在の地理的知識を以て直ちに過去を類推しようとしたのである。もちろんミシハセと肅慎が同一視されるためには、その体質や習俗の比較だけでは充分でなく、何よりも彼らの郷土の地理的な近縁關係の認識が前提とされるのでなければならぬだろう。しかし七世紀の日本人が国土の北辺についてどれほどの知見を有していたか、これはまだ全く論証されていない問題なのである。

例えば日本を表現したもつとも古い地図は、下鴨社所伝の延暦廿四年改定と伝える輿地図（藤貞幹、集古図所収）や仁和寺所蔵の嘉元三年の日本図など、いずれも国土を東西の方向に延長する島として描いている。しかもこの形ははるか後世まで受けつがれるのだが、もしこれをアジアの地図のなかに描きこむとしたら、日本は東方の太平洋上に突出して、奥羽地方は大陸から遠く離れてしまふだろう。中国側の地図でも、日本の北境を大陸に近づけたのは、ようやく近世になつてマテオ・リッチなどによるヨーロッパ系の世界図がつくられてから後のことである。地図の表現と地理的知識とは必ずしも並行するものではないが、後世の

地図でさえこのような状態であるとすれば、古代の日本人がミシハセを見てこれを肅慎と考えたのは、けつして「当然」とはいえなくなってくる。この両者を一致させるものは客観的な地理的事実ではなくて、その当時の人々の抱懷した地理的觀念だからである。そうだとすると、ミシハセと肅慎が国史の上で同じ民族として理解されたということは、むしろ逆に、国土の北辺と大陸との地理的近接について、日本人が或る程度の認識に達していた事実を証示するものだと考えたい。

新しい課題がそこから展げてくる。日本人がその国土の東北部についてさえあまり確実な知識をもっていなかった時代に、遠い大陸との関係についての、このような地理的認識はいかにして成立したのだろうか。そしてそれは比羅夫の北征とどのような関連をもつのであるか。

二

私はこの問題を説明する手がかりとして、まず日本の国土における北方の觀念について考えてみたい。ミシハセも肅慎も大和の人々にとつてはともに北の国の夷狄であり、

この両者を直接媒介したものは、何よりも北方という地理的表象だつたと考えられるからである。

周知のように今日では本州の北端とされる陸奥は、古くは東の国と考えられていた。これに対して日本の北方とは、都の北に当たたる越の国であつた。これは多くの古代民族の間に見られるように、支配者の居住地を中心に国土を東西南北に配して考える主観的に図式化された国土觀に基くもので、例えば孝徳紀（白雉元年の条）に見える「四方の大八島」という思想にもそれが現われている。こういう考え方にあつては、北国も東国も、知見の拡大に従つてその外延をひろめていくだろう。陸奥が東国であるのは、この方面の開拓が進むにつれて、それが毛の国や常陸の延長と考えられたからにほかならない。それと同様に裏日本方面の知識が進展すると、越の延長として後の出羽から津輕に至る地方までが北の国の範疇になることになつた。従つてこの地方の住民である蝦夷に対しても、斉明元年紀に見えるように、陸奥のものを東の蝦夷、越のを北の蝦夷として區別することが、かなり後まで行われた。奈良朝の蝦夷討伐に當つて陸奥方面に向かう軍隊の統率者を征夷將軍、鎮東將

軍、征東大使などと呼び、裏日本に対するものを鎮狄將軍と称したのもその一例である。^⑦こうして古代における日本の北境は越から日本海に沿う地域を指したので、このルートを通じて知見に入つてきた渡嶋やミシハセもまたおのずから北の国とされたのである。

ところが、日本にとつてはもう一つの北方があつた。それは楽浪通交以来半島を通じて知られていた北鮮、遼東の地方である。すでに韓土そのものが、宋書の倭王武の上表にも、また神代紀にも「海北」として表現されている。そしてその北方には好太王以来の高麗が、日本人の心に強く印象づけられていた。

だがこれはもとより国土の北辺という意識とは關係なく、むしろ中国的な世界像への接点としての筑紫を基点とした觀念であつた。それだけにこの北方は、心理的に中国の側へ、すなわち西方へ傾いていたと思われる。ところが六世紀の半ばごろ、半島の情勢の變化に伴つて、日麗間に使節の往来が見られるようになった時、この地理的關係の認識のうえにも、おのずから新しい問題が提起されてきた。それは欽明朝の三十一年（五七〇）に高麗の使人が越の海岸

に漂着したことにはじまる。後に渤海の使が來往した日本海經由の航路は、この時はじめて大和の人々の意識に上つたのである。^⑧つづいて敏達紀二年、三年の条にも同じように高麗の使が越の國に來着したことを伝えている。この時朝廷では高麗の使が頻りに路に迷うことを猜つて、饜せずして放還し、吉備海部直難波をその送使としたが、難波は風浪を恐れて高麗の使を海に投じ、海中に鯨魚がいて船を呑もうとするので帰つたと偽つて報告したという。ここで道に迷うことを疑つたというのは、後に政治的考慮から渤海の使に対して北陸方面への來航を禁じたのと軌を一にするようであるが（統紀、宝龜四年六月）また越と高麗との地理的關係についての不審もあつたのであろう。都に入れずに放還した使人に送使を附したのもこの新航路を調査するためであつたかと思われ、大魚に船を呑まれようとしたという報告も未知の海への恐怖を物語るようである。

従来日本の西陲である筑紫から半島を通じて北方と考えられていた高麗は、こうして意外にも国土の北境である越と結びついた。このことは高麗の位置が、これまで考えられていたよりもはるかに東へ張り出してきたことを意味す

る。推古朝あたりから高麗の僧侶たちの来朝も著しくなるが、それらの国際的知識人からの伝聞によつても、このような考えは一層確められていつたことだろう。

これはまた大和の人々に越の国の意義を改めて認識させることにもなつた。この方面に関する中央の注意も、このころから高まつていつたようである。欽明五年紀に見える肅慎の佐渡漂着譚は、説話の内容もその年紀も信憑性を疑われるものではあるが、しかしこのころには、大和の人々の間に北越方面の異人漂着の物語を単なる奇聞以上のものとして耳を傾ける用意ができていたということも疑えぬ事実であろう。さらに崇峻二年紀は東海、東山と並んで北陸へ阿倍臣が遣され、越等の諸国の境を觀せしめたと伝える。津田博士は蝦夷との交渉に關して、大化改新以前にはそれが地方人の手に委ねられていたが、改新後中央集権の結果政府が直接経営に当たることになつて、その規模も大きくなり活動も活潑化したと説かれた。^⑩これはまことに傾聴すべき見解である。ただそれはもとより改新によつて明確な一線が引かれるのでなく、それを準備し、それへ盛り上げる期間があつて、その胎動はすでに六世紀末からはじまつて

いたと見たい。

こうして蝦夷との交渉が次第に中央の手に移つていつたことは、大和の人々の視界を遠く国土の北辺にひろげたばかりでなく、それまで地方的に断片化されていた夷地に関する知識を中央において脈絡づけ、広い展望のもとに秤量することを可能にした。そしてもしこの知見が、高麗との通交によつて蓄積されてきた大陸東北部についての知識と結びつくとすれば、日本の北端はおのずから大陸に接近することにならう。今や筑紫を通じて半島の北部にあると考へられていた高麗は、より東に、海をへだててわが越の北方にある。そしてその越からは未知の夷地が遠く北方に延びている。とすれば越の海岸沿いにさらに北に進めば、やがてこの二つの北方は相合することになるだろう。そこは蝦夷からの伝聞によればミシハセと呼ばれる異民族の郷土であり、それはそのまま高麗の北にあるという肅慎氏の国ではないのか。まだ推測の域を出なかつたにしても、このようにして大和の人々の脳裡には、国土の北辺の地理像がおぼろげながら浮かび上つてきたものと想像される。

比羅夫の遠征は、疑いもなくこのような北方地理に關す

る考えを現実のものたらしめた。斉明五年紀には、わが国に來朝した高麗の使人が罽の皮を高価に売ろうとしたが、招宴の席に七十枚の罽の皮が敷かれてあるのを見て羞じ恠んだという話がのせられている。これはその前年、比羅夫がミシハセの国を討つて生罽二つ、罽の皮七十枚を献じたという記事と関連するかと思われるが、半島を経由する満州方面の特殊な産物が、別にわが北辺からも豊富にもたらされたということは、おのずからこの二つの地方の地理的同一に想到させるものがある。その意味でこれはわが中央の知識人の間に、二つの北方の影像が一つに結ばれてゆく過程を示すエピソードとして興味をひく。

しかもこのことは、北方の未知の国を中国人の地理的知識によつて解釈し、新しく見出された自己の国土の北辺をその体系のなかに位置づけようとする試みであつたことに注意したい。いうまでもなく当時の日本人にとつて中国の世界知識はそのまま古典的權威をもつものであつた。従つて新たな知見をそのなかに組入れることは、またこれを權威ある知識として安定させる所以でもあつたであらう。その意味からも、国史のなかでミシハセにあてられた肅慎と

は、単に具体的に楛矢石簪の使用者を指すものでなく、むしろ象徴的に、国土の北辺と大陸との地理的媒介者としての性格をになつていたのである。

三

わが国土の北辺に関する地理的觀念は、古代においてこのように展開した。われわれはこの問題のなかで、改めて阿倍比羅夫の北征の意味を考えてみようと思う。

すでにしばしば指摘されているように、比羅夫の北進は異常に早く、途中で夷酋を郡領とするなどのことはあるが、とくに夷地のなかに和人の進出のための確実な地歩を一步築いていつたらしい様子は見えない。もつとも丸山二郎氏のように斉明紀の記事を多年にわたる北進の集約的な表現と解する説もあるが、北征の史実そのものに関する限り、これを肯定し得るだけの根拠に乏しいように思われる。かえつて最近では村尾次郎氏が三年に亘る斉明紀の比羅夫關係の記事は実は一年の出来事としてまとめ得るという注目すべき説を発表された。これについては坂本博士にも周到な考証があり、その論旨は、斉明紀四年、五年の兩条の

記載は一回の事件の重複と認められるが、六年の条の肅慎討伐の記事はこれとは別の独立した事実で、すなわち比羅夫の北征は二年にわたつて行われたものと考えられるというにある。もつとも穩当な解釈とすべきであろう。いずれにしても、そうなると比羅夫の北進のスピードは書紀に記されている以上に速いことになり、その間に行われた蝦夷の招撫も、ただひたすらな北進のためのベースをつくるにとどまつているような印象を受ける。事実この方面の夷地の着実な拓植は、さらに半世紀後の和銅元年（七〇八）に最上河口附近に出羽郡が置かれたころからようやく緒についたと見られるのである。それでは、比羅夫にこのように急速な進出をなさしめた目的は、一体どこにあつたのだろうか。

津田博士はこれについて斉明元年紀に突然津輕の蝦夷の來朝した記事のあることに注意し、この方面の蝦夷は早くから日本海沿岸航路によつて南北に往来していたが、この時北方のミシハセの圧迫を受けて越の国に救援を求めたのではないかとの見解を提出された。その後の諸家もニュアンスの相違こそあれ、いずれも基本的にはこの説を繼承し

ている。^①だがそれは比羅夫の北征を促した蝦夷側の事情を指摘するものではあつても、その乞に応じた日本側の意図を充分に説明するものとは思われない。丸山氏がすでに論じられたように、比羅夫が北征に際して率いた舟師は、書紀に百八十艘或は二百艘といわれ、それに誇張があるにしても、なお當時としては第一級の動員であつたことが知られる。少くともこれは罽の皮や昆布の交易を維持する代償としては少し大き過ぎるように思えるし、まだ国家的秩序を形成するまでにも至つていなかった遠い北辺の夷狄の紛紜が大和の人々にそれほど切実な危機感を与えたとも考えられない。もつとも村尾氏はこれについて、大化改新以前に和人の交易基地はかなりの北方に及んでいたとの想定からミシハセの南下によつて蝦夷の間にも動揺が起り、日本に反抗の氣勢を示すものもあつて、遂にはわが地盤を危くする傾向を生じたと考え、大化の淳足、磐舟の柵の構築も日本の積極的な進出というより、この趨勢に対する防禦措置と見、比羅夫の遠征はその鎮圧のためであつたとしておられる。この説は多くの示唆を含んでいるが、しかし全体としてはやはり言い過ぎてであると私は思う。書紀に記す限り、

このような蝦夷の動搖の徴候と思われるものは特に見当らないし、また比羅夫の遠征自身がミシハセに接觸するまで、途中はとんど見るべき抵抗を受けていないからである。

私もまた津軽蝦夷の乞師を、きわめて有り得ることだと考える。しかしそれにしても、それは比羅夫の北征の單なる直接の動因であるに過ぎないだろう。むしろ北征の眞の目的は、すでに述べたような国土の北辺と大陸との地理的關係を明らかにすることにあつたのではないだろうか。いかえると、この遠征は特に地理的探検の性格を色濃くもつものであると思う。だからこそ比羅夫の意図は、他の蝦夷地経営の場合とは類を異にし、はじめからだ一途に遠く肅慎の國に到達することを計画していたのである。それが書紀の記載では、一部の説話的な性質をもつ記録によつて蝦夷の討伐と混同されたのであるが、斉明紀の記事のうち官府の記録から出たと思われる津田博士のいわゆる乙史料、坂本博士のいう実録型に屬する記事では、いずれもこの遠征を特に肅慎の國を伐つと記されていることを、改めてこゝて注意しておきたい。こうして遠く大陸と連なると想像された肅慎氏の國に入ることが目的であつたとすれば、

遠征軍のエキップメントの点からも大規模な船隊を動かしたことはうなずけるし、比羅夫がひたすらな北進を続けた事情も理解できるのではあるまいか。

だがそれにしてもなお問題は残る。この時この大規模な探検が行われたためには、それだけの理由がなければならぬからである。

この疑問に対して私がまず指摘しておきたいのは、比羅夫北征の当時の日本が、いわば海外探検時代とも呼べるべき時期にあつたということである。その一般的背景としては推古朝以来大化改新を経て、日本人の世界意識の汪々としてみなぎり溢れるものがあつたことが想起されるが、またそれとともに、日本と海外との地理的關係について正確な知識が要求される現実の事情もあつた。周知のように六世紀末以来の韓土の形勢の變化は、従来半島を足場としていた日本の中国通交の航路をようやく不安定ならしめたが、それは必然的に日本をして新しい海外ルートの開索に向けしめたのである。やや後の記録ではあるが、孝謙朝の遣唐使（七五〇—七五四）について唐書日本伝は「新羅使海道、更竊明越州一朝貢」と記している。規模こそちがえ、それ

はオスマントルコによる東洋通路の閉塞がイペリアの航海者たちを未知の大洋にかりたてた経緯を想起させるだろう。

中国への新しい交通路として、東シナ海を横断するいわゆる南路が構想された端緒は、すでに七世紀の初頭にあると私は考えている。この航路の発見・維持と関連して、この世紀の末期には南西諸島に活潑な探検調査が行われるが、これら南島への関心は早く推古、欽明朝にはじまっているからである。^⑩ それと並んで新航路の啓開を目指す冒險的な試みも七世紀のなかごろから積極化した。これについては別の機会に譲るが、ここではただ比羅夫と同時代の孝徳、齊明朝に二回にわたつて南方航路発見のための探検航海が行われたことを指摘しておくにとどめよう。^⑪

このように見てくるならば、比羅夫の北征もまた統一的国家意志の表現として、南島への関心、中国への新航路の探求と関連する一つの系列のなかで考えらるべきものではないだろうか。わが北辺地理の問題が高麗との関係から導かれるところが大きかったことは前に述べた。そしてもしその北方の肅慎氏の国がわが国土に連接しているとしたら、日本海を横断する危険な航海を避けて、自国の海岸沿いに

高麗への一層安全な捷路が求められるかも知れない。しかもそこからは遼東を通じて中国へ至る道が開けている。たとえば当時高麗と中国とがしばしば敵対関係におかれていたとしても、それは嘗て日本人自身が漢魏の都へ至つた道であり、また後に賈耽が記述した唐代の国際ルートでもあつた。そうだとすると肅慎・高麗を経由する北方の道が当時の国家的要請であつた大陸への新ルート発見の試みの一部として取上げられたのだと考えても、あながち無稽の空想とはいえないかと思う。

すでに吉田東伍博士は比羅夫の遠征を以て、「肅慎の北道」を求めて半島の克服を企てた深謀雄図であつたといひ、唐の新羅救援軍が早く至つたため、比羅夫も兵を班して韓土に赴かなければならなくなつたのだと説かれた。^⑫ このように直接半島問題の処理を目的とした軍事的意図がこの挙のなかにあつたかどうかは疑わしい。しかしこれを単に蝦夷の側から起された辺地の紛紜への介入として解釈してしまふには、この北方遠征はあまりに特異でもあろう。吉田博士の見解は、いわば国家の發展力を無条件に信頼し、それを誇りとするのできた古きよき明治の学者の壮心を

示すに過ぎないかも知れない。しかし少くとも、国土の北
限の出来事をアジアの形勢のなかに見ようとする広い視野
だけは、われわれももう一度反省してみてもよいのではあ
るまいか。

四

比羅夫の意図したと思われる北方ルートの発見はもとよ
り失敗に帰した。その実際に至り得た地方は、諸家のいう
ように、おそらく北海道の南部を出てなかつたであろう。
書紀によるとミシハセの抵抗はかなり激しかつたようであ
るし、また北の国のきびしい自然が遠征軍のそれ以上の北
進を阻んだのだと思われる。だからその踏んだ土地が真に
中国の書物にいう肅慎の国であるかどうかは、比羅夫の遠
征によつては、なお決定的な確認を受けることはできない
はずであつた。大和の人々は、ミシハセに關しては、例え
ば齊明六年紀に石上の池のほとりに須弥山を築いて肅慎四
十七人を遷したとあるように、この異族をまのあたりに見
て詳しい具体的な知識を得ていたわけであつた。しかし大
陸の肅慎については、ただわずかな文献と伝聞によるほ

かなかつたのである。

ところが比羅夫北征から十六年の後、天武朝の四年（六
七六）に來朝した新羅の使は、肅慎七人を伴つていたとい
われる。^⑧ここに至つて遂に肅慎は日本の北辺を通じては
なく、半島を経て大陸から、大和の人々の前に姿を現わし
たのである。しかもそれが国史に見える前後ただ一回の事
例であつてみれば、おそらくこれはミシハセが肅慎である
との推定を確実にするために、わが朝廷から半島の使節に
その北境の夷族を同伴することを求め、新羅がこの時その
約を果たしたのではないだろうか。その結果については何
の記載もないが、ただこのことから、当時の政府がなお北
方の地理、民族の問題について、引つづきかなり積極的
にその解明を求めていたことが知られると思う。

一方北辺のミシハセとの交渉もなおつづけられていた
らしく、持統紀の八年と十年の条に肅慎に位を授け、また物
を賜うなどのことが見える。^⑨その後さらに養老四年（七二
〇）には渡嶋津輕津司諸君鞍男等六人を靺鞨国に遣してそ
の風俗を觀せしめた。ここではもはや肅慎の古名は捨てら
れて、新鮮な靺鞨の名称が用いられている。しかしそれが

依然として北辺の問題として取上げられているのは、比羅夫時代の観念がそのまま八世紀のはじめまで受けつがれ、政府の手によつてなおその探究が試みられていたことを物語るであらう。

そこで比羅夫の遠征がもたらした地理的知識への寄与を考えてみると、その第一に挙げられるのは、いうまでもなく日本と大陸との関係についての新知見である。それまで日本は中国的な世界像のなかに、わずかに筑紫を通じて連なつてゐるばかりだつた。筑紫へは魏志倭人伝の記載以来、半島からの位置的関係はすでに計量化されていた。しかし国土の東部は、前にもふれたように模糊として海中に没し去つていたのである。中国の側でも、唐書に見える流鬼が通説のように樺太を指すとしたら、大陸の東北部について意外に詳しい情報、が得られていたことになる。しかしその部分と日本の北辺とは全然結びついていなかった。むしろ当時の中国の地図には、例えば今は失われた賈耽の海内華夷図の如きも、日本は現在の位置よりはるか南に偏して、しかも九州から南方に延びる島嶼群として表現されていたらしい。現存する宋代の地図にも毛人や蝦夷が倭国や日本

より南に位置づけられている^⑨。したがつて肅慎氏の国を媒介として日本と大陸とがつながつたことは、歪められた日本の地理的形姿をほぼ正しく描き直すことになるべきはずであつた。しかも注意すべきは、このことによつて従来朝鮮半島の東岸部から日本の山陰方面にかけてのみ知られてゐるに過ぎなかつた日本海が、おそらくここにはじめて東アジアの縁海として、そのほぼ全き姿を結像したことである。いうならばそれは日本海の生誕であつた。日本人の地理的知識の発展の上に、これは記憶さるべき出来事であると思うが、それも多くの比羅夫の北征に負うていたのである。

第二に、この遠征は日本の国土自身の形状について、新しい認識を加えた。この挙によつて国土の日本海岸はおそらくその北端まで極められ、さらにその北方に連なる島々についても、なにがしかの知識が得られたことは疑いないだろう。この地方は或はそれまで和人の未到の地といふではなかつたかも知れない。しかし少くとも中央の知識人にとつては未知の国であつた。したがつてこの遠征の報告は、それまでの日本の地理像をその北辺において大きく修

正するものだつたと思われる。それが具体的にどのようなものだつたかは知る由もないが、もし強いて後世の地図のなかにそれを求めるなら、或は拾芥抄所載の日本図のようなものではなかつたかと想像される。前に述べた集古図所

収の延暦図や仁和寺の嘉元図などは、奥羽地方を陸奥を主体として東に延びる形に描いていた。ところが同じ行基図の系統に属する拾芥抄の日本図では、国土の東北部がかなり起き上つて、今日の地図に近づいたような印象を与える。

しかしこれは実は依然として東西の方向をもつ陸奥の北側に、津軽大里と記された広い一区域が半島状に附け加えられたのによるものだつた。そしてそれに伴つて津軽の西側に奥羽の海岸が北に向かう形をとつてゐる。拾芥抄がつくられたのは鎌倉時代の末期とされるから、この図を直接比羅夫の遠征と結びつけることは無謀といつていい。しかし陸奥をそのまま東国の位置におきながら、津軽を中心として奥羽の日本海側を強調した特異な表現は、もし比羅夫の知識を地図化したらこのような図形になるのではないかと思わせるものがある。そしてこういう形の日本ならば、斉明五年紀に引かれた伊吉博徳の書にあるように、蝦夷の住

地を正しく国の東北にあると述べることもできたはずであつた。いずれにしても比羅夫のもたらした知識によつて描かれた日本地図があつたとしたら、それは陸奥方面に経営の重心が移つた後世の地図よりも、かえつて進んだ形を示していたらうと想像されるのである。

しかし比羅夫の遠征がもたらしたこのような数々の成果も、不幸にして後世に受けつがれるに至らなかつたように見える。探検の直接の目的だつたと思われる北方ルートの啓開が失敗に歸したうえに、村尾氏のいわれるように経営の方針自体が交易関係から開拓的な植民政策へ転換したことは、北征によつて得られた知見を特に実質的利害と関係の薄いものとした。知識を知識として継承し發展させてゆく体制の存在しなかつた場合、現実への直接な関連の欠除は、いつでも知識そのものに苛酷な運命を負わせる。はじめはかなり熱心に北辺の地理的關係を追求したように見える政府も、やがて次第にその興味を失い、肅慎の記載も元正朝の靺鞨国視察を最後に長く国史の上から消滅してしまつた。後に延喜十四年(九一四)の三善清行の封事に「東平_ニ肅慎_一、北降_ニ高麗_一」(本朝文粹卷二)という対句となつて

現われた時には、肅慎はもはや夷地としての陸奥の延長たる東の国とされ、その本来の意味が忘れられてしまつたことを示している。こうして、すでに述べたように日本の国土は依然として東西の方向をもつて表現され、その東端は奥州外が浜、西端は鎮西鬼界が島（源平盛衰記）と考えられるようになり、平安朝以後の海外意識の低調にもなつて、国土と大陸との位置的關係への関心もうすれてしまふのである。

だがそれにもかかわらず、日本の北辺が大陸の満州方面と近いという觀念は、断続しながらも長く人々の心の隅にひそんでいたらしい。宇治拾遺物語卷十五にある安倍頼時が夷地で胡人を見たという説話は、そのかすかな露頭でもある。申叔舟の海東諸国記の序に日本の地が黒龍江の北にはじまると言い、さらに時代は下るが、同じく朝鮮でつくられた倭虜国図と題する日本図にも、倭人が陸奥から朝鮮の東北部へは海路至近であるといったと記しているのも、このような日本人の考えが半島にまで伝聞されていたことを思わせる。

しかしながら、日本の北辺の地理が新しい脚光を浴びる

のは、近世になつてヨーロッパ人の地理的探検が北太平洋に及んだ時からであつた。ことにロシア人の南下は、日本の学者たちをも、国家的緊張をもつてこの問題に参加させることになつたが、その全き解決は一八世紀末から一九世紀のはじめにかけて行われたラベルズ、ブロートン、クルーゼンシエテルン、或はわが間宮林蔵等による探検を待たなければならなかつた。東北アジアにおける日本と大陸との關係は、こうして日本の北辺の地理が探究される時、常に現われてくる問題であつたが、その解釈に先立つ千百年の昔に、すでに阿倍比羅夫は、この二つの地方に住む民族の一致という形で、この地理学的課題に答えようとしていたのである。

村尾次郎氏は、ついに正体を現わさぬ国史上の肅慎を「支那風の雅名にかくされた歴史のシルエット」にたとえられた。たしかにそれは単に北辺において見出された異民族であるのみではなかつた。それは日本と大陸との地理的連繋の象徴でもあつた。だからこそ、この地理的關係への関心がうすれた時、そのまま消滅すべき運命にあつたのである。肅慎が暗い北の海にうつし出されたかりそめの影絵

であつた所以は、ここにあるのであらう。

註

- ① 拙稿 蝦夷地―その地理学史的意味（京大文学部編 紀元二千六百年記念史學論文集 昭和一六）
- ② 田名綱宏 阿倍比羅夫の渡島遠征について（日本歴史六六）
村尾次郎 渡島と日高見国（芸林五ノ三）
- 坂本太郎 日本書紀と蝦夷（古代史談話会編 蝦夷 昭三二）
なお板橋源、阿倍臣肅慎征討年代考（岩手大学学芸学部年報一昭二五）があるが参照できなかつた。
- ③ 池内宏 肅慎考（滿鮮史研究 上世編 昭二六）
- ④ 村岡良弼 日本地理志料
- 吉田東伍 大日本地名辭書
- 白鳥庫吉 肅慎考（歴史地理 一七ノ一）
- ⑤ 丸山二郎 齊明紀に於ける阿倍臣の北進に就いて（史學雜誌三八ノ一一）
- ⑥ 津田左右吉 肅慎考（日本古典の研究 下 昭二五）
- ⑦ 日本後紀弘仁元年十月の条にも「渡島秋」というような用例がある。
- ⑧ 蘆田伊人 平城平安時代日本海海上交通路の概観（歴史地理五七ノ四）
- ⑨ 津田博士はこの記事を虚構とされたが（前掲書一〇八頁）坂本太郎博士はその信じ得ることを反論された。（前掲論文七四頁）
- ⑩ 日本古典の研究 上 二二―四頁

⑪ 註②の諸論文並に坂本太郎 大化改新の研究 昭一三、四六八頁など参照。

⑫ 天武紀八年、十年、持統紀九年、文武紀二年、三年等の条。

⑬ 推古紀二十四年、二十六年、舒明紀元年等の条。なお隋書倭国伝に大業四年（六〇八）わが遣隋使が流求の布甲を見て邪久国人の所用だといつたというのが、日本人の南島への知見を示すもつとも古い記事である。

⑭ 孝徳朝の白雉四年の遣唐使が薩摩の近海で遭難したのは南路の啓開を試みて失敗したものとされる。また齊明朝五年の遣唐使が百濟南辺の島から漂流して浙江省方面に着岸したのは、我が使船による東シナ海横断の最初の記録である。藤田元春博士はこれを偶然的の成功といわれるが、私はやはり計画された探検航海であつたと思う。藤田元春 上代日支交通史の研究 昭一八、二一―八頁参照。

⑮ 吉田東伍 日韓古史断 明治二六、四五―八頁

⑯ 津田博士はこのことが新羅の使に関する記事とは別に「是月云々」として出ているところから、これを事実として認められないといわれるが（前掲書 下 二七―四頁）それだけではこの記事を否定する根拠にはならない。博士による肅慎の解釈では、それが新羅の使とともに現れる理由が説明できないので、それが先入観となつてこの記事を否定されたのではないかと思われる。

⑰ このうち八年紀正月の大唐七人とともに授位された肅慎二人というのは、或はさきに新羅の使に従つて来朝したものがその後日本にとどまつていたのを指すのかも知れない。

⑮ 拙稿 魏志倭人伝に描かれた日本の地理像 (神道学 一〇)

⑯ 拾芥抄の日本図に似て奥羽の裏日本側を強調した図には、秋阿武次郎博士が弘治三年前後と推定された唐招提寺所蔵の日本図があり、また形はやや変化しているが申叔舟の海東諸国記に

のせる日本図も津輕大里を記して拾芥抄の図に関係深いものである。

⑳ 藤田元春 増訂日本地理学史 昭一七、八三頁

(一九五六・七・一五)

会 報

史学研究会十月例会、及び文学部創設五十周年記念特別例会
の予定は次の通りです。多数の御出でをお待ちしております。

一、十月例会

日時 十月六日 (土) 午後一時

場所 京都大学薬友会館

中国における終末思想

春鑑抄・三徳抄と韓倫抄について

兼子 秀利氏

今中 寛司氏

堺市における小売商店街とその商圏

——衛星都市の性格について——

位野木寿一氏

一、文学部創設五十周年記念特別例会

日時 十一月二十四日 (土) 午後一時

場所 京都大学法経第六教室

日本史 雑戸の労役について

東洋史 演題未定

西洋史 全 右

考古学 全 右

地理学 全 右

福尾猛市郎氏

富川 尚志氏

水川 温二氏

澄田 正一氏

村松 繁樹氏

The Expedition to North by Abe-no-Hirafu (阿倍比羅夫)

by

Nobuo Muroga

In terms of Japanese history, 肅慎 reads Mishihase. This reading depends on one hand, on the knowledge of northerners originated in China, and, on the other, coincides with the geographical view of Japanese themselves that the Japanese Islands and the China Continent come very close in upper north. The latter view may result from the communications between Korai (高麗) and this country since around the end of the sixth century. The author argues that the northward expedition of Abe-no-Hirafu intends not only to intervene in a conflict between Mishihase and Ezo (蝦夷), but also to explore geographical relations in this area, and, further, to discover an international trade route due to of the request of the government.

Although the problem of the geographical relation between the northern part of Japan and that of the Continent had remained unsolved, Hirafu seems to have interpreted this problem by identifying the people living in both areas.

Hundred Years' War and the Making of French Nation ; on the regime and the resistance in Normandy

by

Hiroshi Kawaguchi

It is taken for granted that the period of Hundred Years' War coincides with that of the making of French nation, and that the popular resistance under the English occupation is "national resistance." The author here, analyzing the resistant movements among the common people and the policy of English occupations in Normandy, intends to discuss whether these movements are really "national ones" and, further, to discuss in what relations these movements are with the growing French nationalism, including the problem of the stages of the development of the nationalism and its connection with the royal family.